写真提供：野営地

写真撮影：前澤秀登 Hideto Maezawa
提供：東京都現代美術館 Museum of Contemporary Art Tokyo

塩見允枝子

塩見允枝子パフォーマンス作品

『～音と詞と行為の時空～』

「詞と概念を演奏する」
「ピアノ × パフォーマンス」

Shiomi Mieko

Shiomi Mieko Performance Work — *The World of Sounds, Words and Actions* —
"Performing Words and Concepts"
"Piano × Performance"

2022.8.6 Sat

愛知県芸術劇場 大リハーサル室

Large Rehearsal Room, Aichi Prefectural Art Theater

STILL ALIVE
国際芸術祭
あいち2022

曲目解説（塩見允枝子）

Program Notes (Shiomi Mieko)

プログラムA　詞と概念を演奏する

出演：植松琢麿、大井卓也、上中あさみ、中村圭介、橋爪皓佐、橋本玲子、森本ゆり、山根明季子

1. そして夜鷺は翔んだ―ことばのキャッチボール（1992/2020）

ことばのパフォーマンス：橋本、上中　音の演奏：橋爪、山根、植松、中村

ことばを偽物化した作品。2人の演奏者が離れた位置に立ち、キャッチボールの要領でことばを投げては、受け取った側はそれを読み上げる。2人は全く異なった事柄についての一連の文章の断片を投げ合うのだが、両者はときに意味が同調して絡み合う。ことばの移動中と受け取った瞬間には、別の演奏者による音が付随する。なお、この作品の原型は1992年に神戸のジーベックで、別のテキストとスピーカーによる音像移動で行なった。

2. 円周上の詩（1966/2022）

ことばのパフォーマンス：全員

円周上に立つ8人はスポットライトを手に持ち、各人が異なった分野のことばを内蔵する装置として行動する。リーダーが任意の1人の顔に光を当てると、光が当たった人は内蔵することばを一つ発し、次の誰かに光を当てる。光を当てられた人も同じようにことばを発し、次の誰かに光を当てる。このようにしてことばを繋いでいくのだが、途中から光を任意の2人に連続して当てることで、2声、3声としてことばの環を重層化する。発音の仕方は自由。また、全員が、演奏中任意のタイミングでしゃがんでライトを消し、最大20秒の休止を2回まで取る権利を持つ。

3. 並行する時間（1966/2022）

パフォーマンス：全員

演奏者全員が、おのおの異なった時間に沿って行動する。バッハの「パルティータ第1番」を部分的に再生する人／その音が消えた瞬間、世界6か所の現地時間を告げる人／ 1分ごとにベルを鳴らす人／水の中にチューブで息を吹き込み続ける人／それを数える人／何呼吸かごとにピンポン玉を床に投げつける人／何呼吸かごとにハーモニカに息を吹き込んだり吸ったりする人／錘に振り子運動を与え、それに連動したタイミングでピアノの内部を叩く人。無関係性が作りだすシンプルな時空に生じるものとは――。

4. アザレアと影法師（1966/2022）

ことばのパフォーマンス：森本、山根　音の演奏：橋本、上中、橋爪

2人の演奏者が離れた位置に置かれた回転椅子に座る。まず1人が合図として椅子を回転させてから、この一対のことばを自由に組み合わせて疑問形のイントネーションで発音する。すると他者は、この二つのことばを別の形で組み合わせて、肯定形のイントネーションで答える。この応酬をさまざまなことばの組み合わせで続けていくのだが、途中でほかの演奏者による音楽が聞こえてくると、2人は立ち上がって席を交代する。そして<瞬間移動とオブリガート>、中断の音楽、<デルフィニュームと海底火山>で同様に質疑応答を続ける。一対のことばの組み合わせ方と緩急のリズム、抑揚や表情の妙技を競う音声作品。

5. G.マチューナスへの追悼（2019）

指揮：橋爪　演奏：大井、上中、中村、橋本、森本、山根

2019年にイギリスのnewCELFというグループからの依頼で書いた作品で、マチューナスの代表作<アドリアノ・オリヴェッティへの追悼>のパロディー。6人の演奏者は、メトロノームのビートに合わせて繰り出される指揮者の合図によって、それぞれF、L、U、X、U、Sから始まる単語を発音したり歌ったりする。途中から、ことばは次第に手に持った簡易楽器による音にとって代わられ、次いで指揮者もメトロノームの規則的な拍を無視した合図を出してカオスを引き起こす。<アドリアノ・オリヴェッティへの追悼>が全体として終始無変化の構造であるのに対して、この作品ではセクションごとに異なる演奏となるような構成となっている。

6. 方向のイヴェント（2012/2022）

パフォーマンス：全員

この作品の原型は、2012年東京都現代美術館で開かれたトーク&パフォーマンス「インターメディア/トランスメディア」のために書いたもので、演奏者達はおのおの向かう方向を決め、終始そちらの方向を指向する。今回は8人の演奏者が、「今から10分後の時に向かって」「この本の最後の頁に向かって」「この楽器の出せる最低音に向かって」「より長いフレーズに向かって」「高速回転へ向かって」「プレスティッシモに向かって」「膨張と拡大の方へ」「階段に向かって」とアナウンスした後、それぞれのパフォーマンスを行なう。なお、この<方向のイヴェント>は、1965年に地球をステージとしたスペイシャル・ポエムNo.2でも行なったが、同じ方向という概念を、2018年にはニューヨークのWhiteBoxでインスタレーションとして作品化したこともあり、これらはトランスメディア（一つの概念を次々に異なった媒体で作品化すること）の具体例でもある。

プログラムB／ピアノ×パフォーマンス

出演：植松琢麿、大井卓也、上中あさみ、中村圭介、橋爪皓佐、橋本玲子、森本ゆり、山根明季子

1. アルバトロス（2021/2022）

ピアノ：森本　打楽器：上中　パフォーマンス：大井、中村、橋爪

2021年、ピアニストの大井浩明氏からの委嘱で書いた小品にパフォーマンスを組み合わせたもの。この曲の一番の特徴はソステヌート・ペダル（3本の内の真ん中のペダル）を踏んで弾く、幅広い跳躍を含んだ単音のフレーズである。ある和音を打鍵してからこのペダルを踏むと、それらの音だけが開放弦となり、その後それと倍音関係にある他の鍵盤を強くはじくと共振を起こすので、豊かな響きとなる。ダンパー・ペダル（右側のペダル）を踏んで、全体の弦が共振を起こす場合よりも響きが澄んでいるので、その効果を活用した。そして、こうして行われるピアノ演奏を、通常ではあり得ない第三者が取り囲む。

2. ピアニストの為の落下のイヴェント（2022）

ピアノ：森本　ナレーション：大井　紙飛行機操作：植松

脚立の上のナレーターは、1966年に行なったスペイシャル・ポエムNo.3「落下のイヴェント」の記録の抜粋を朗読し、カードを落下させる。そしてその瞬間、ピアニストは短いフレーズを弾く。更に空間的対位法として、特定の報告が読まれるたびに、それらの記録を印刷した紙で折られた飛行機がバルコニーから放たれる。「落下のイヴェント」の記録は国際芸術祭「あいち2022」現代美術展（愛知芸術文化センター10階）でも展示されているので、両者を橋渡しする意味で、この記録をもとにピアノのパートを新たに作曲した。

3. 消滅した文明について（2019/2022）

ピアノ：山根　ナレーション：大井、上中、中村、橋爪、橋本、森本

4. クラスターと残照（2022）

ピアノ：山根　打楽器：上中　パフォーマンス：植松、大井、中村、橋爪、橋本、森本

5. 氷河とケツァール（2019/2022）

ピアノ：山根　バリトン：大井　ナレーション：上中

この3つは一連の作品として演奏されることが望ましい。3.では、6人のナレーターがそれぞれ異なった過去の文明についてのテキストを、次第に強さを増す声で朗読しながらピアノに近づく。そしてその声量が最大になった瞬間、ピアニストは下降グリッサンドで遮断する。そして4.では、さまざまなクラスターのフレーズを演奏するが、その度に異なる音色の残響のように、打楽器による音やノイズに近い音が発生し、やがてベル系の澄んだ音色に変化する。その後、5.になると、ピアノの緩やかに連打される和音に乗って、バリトンによるレチタティーヴォと女声によるナレーションで、交互に氷河とケツァールについての文章が歌われ読まれる。なお、3.と5.の原型は、2019年京都市立芸術大学で行われたコンサートで初演した。

6. アナグラム（2022）

ピアノ：中村　打楽器：上中　ナレーション：大井

アナグラムとは、一連の言葉の文字の順序を入れ替えて、別の意味を持つ言葉にする遊びだが、この超時間的な構造を音で実現するとどんなことになるだろうか、という好奇心で作曲してみた。まずテーマとして、8種類の特徴的な短いフレーズを並べ、次いでその順序を変えて連結する。その際重要なことは、それらの連結が音楽的に新鮮かつ自然に響くかどうかということである。次はヴァリエーション1。テーマの単純なフレーズをより長いフレーズに展開し、次いでその順序を変える。そしてここからはナレーションと打楽器が交互に入る。ピアノのフレーズが長くなると、その構造は次第に聞き取り難くなるが、短いことばや打楽器の特徴的な音が重なると、それが容易になると考えたからだ。

ナレーションは、「1）コートジボワールから　2）上昇気流に乗って　3）カモミールを下さい　4）噴水のほとりで」を、打楽器は4種類の異なった音色の短いフレーズを、ピアノ譜に指定されている箇所で演奏する。次のヴァリエーション2では、ピアノのフレーズはさらに長くなり、ナレーションのことばと打楽器のフレーズも、それぞれ8種類に増える。続いてそれらの順序の組み換え。このように変奏曲として作曲していくと、際限もなく拡大していくことができる形式ではあるが、今作ではここまでとした。なお、打楽器の具体的な音選びに関しては、演奏者の上中あさみさんにお任せした。余談だが、フルクサスの友人ジャン・デュピュイはアナグラムの達人で、90年代には沢山の詩を作って送ってくれたが、いつかこの手法で音楽を書いてみたいと思っていたのだ。

7. 幽閉された奏鳴曲（2014）

ピアノ：中村　ピアノの内部演奏：橋爪、橋本、山根
ネット操作：植松、大井、上中、森本

2014年に東京都現代美術館で開かれた「Fluxus in Japan 2014」の際に初演した曲で、ピアニストが弾く奏鳴曲（ベートーヴェンのソナタOp.27 No.2「月光」の第1楽章）が、内部奏法による騒音で覆われ、さらにはその演奏自体が視覚的にも白いネットで覆われるという作品。今回はアンコールのつもりで最後に演奏して頂く。一般に、既成の音楽を破壊の対象として使用するとき、私はよくベートーヴェンの曲を取り上げてきたが、なぜか？ と訊かれることもある。その理由は、好き嫌いや思想の問題ではなく、騒音で覆うにしろ中断するにしろ、暴力的な音を仕掛けていく対象として、彼の音楽が「打たれ強い」からである。騒音まみれになりながらも、のんびりと骨太で暖かくお人好しで……つまり、破壊し甲斐があるからなのです。

出演

Performers

植松琢麿

Uematsu Takuma

美術家。2000年関西大学卒業。出版社勤務を経て、2001年より国内外の美術館やギャラリーで作品を発表。自然科学や哲学への興味をもとに、社会や自然への新たな視点をさまざまなメディアと手法で表現する。主な展示に「Shanghai Jing'an International Sculpture Project」（静安測塑公園、2021）、塩見允枝子&植松琢麿「星をめぐる冒険」（ユミコアソシエイツ、2019）など。

中村圭介

Nakamura Keisuke

京都市立芸術大学音楽学部卒業。文化庁在外派遣制度研修生としてドイツ国立ハノーファー音楽演劇大学芸術家養成課程、同大学ソリスト課程へ進み研鑽を積む。神戸市混声合唱団ピアニスト団員。グリーグのピアノ作品集「抒情小曲集全集」と「アリエッタ」をStudioN.A.Tよりリリース。

森本ゆり

Morimoto Yuri

ピアニスト。大阪音楽大学作曲専攻卒業後に渡仏、クロード・エルフェ氏に師事。Centre Acanthesではヤニス・クセナキス氏の薫陶を受け、ヴィルクローズ音楽アカデミーより招聘。next mushroom promotion（サントリー音楽財団佐治敬三賞、2005）、アンサンブル九条山（音楽クリティック・クラブ賞奨励賞・大阪文化祭賞奨励賞、2019）の各メンバー。ダンサー田中泯、倉田翠各氏、能楽との協働も手がける。

大井卓也

Oi Takuya

声楽家。京都市立芸術大学音楽学部卒業。小林まゆみ、折江忠道の各氏に師事。現代音楽の演奏やパフォーマンス作品への出演、美術家とのコラボレーション、ワークショップなど、幅広く活動する。また、ジャワガムランの演奏グループ「マルガサリ」の代表をつとめるほか、「一般財団法人たんぽぽの家」のスタッフとして障害のある人たちの芸術創作支援に携わっている。

橋爪皓佐

Hashizume Kosuke

作曲家・クラシックギタリスト。日本、英国、フランス、ベルギーで音楽を学ぶ。関西を拠点に、音をシェアする空間の枠組みを再考、再構築することを主なテーマとし、さまざまな分野との共有領域において、音楽的な技法を展開し、新たな提示方法による制作を行う。平行して伝統的な西洋音楽の演奏活動、作曲活動も行っている。京都市立芸術大学芸術資源研究センター非常勤研究員、京都女子大学非常勤講師。

山根明季子

Yamane Akiko

京都市立芸術大学大学院修了。消費社会やポップ、抑圧、カワイイなどを題材に作曲をするほか、持続音によるソーシャルインスタレーションやアミューズメント空間のフィールドレコーディング、欲を含めた個々の小さな感覚を傾聴、共有する活動を続けている。芥川作曲賞などを受賞。演者としては森美術館、国立国際美術館、TRANS-神戸、のせでんアートラインほかで、美術作家らによるパフォーマンス作品に参加している。

上中あさみ

Kaminaka Asami

京都市立芸術大学卒業。同大学院修了。打楽器奏者として現代曲の初演、他分野とのコラボレーションに意欲的に取り組み、室内楽、オーケストラなどで活動中。子どものための公演を軸に活動する「ハッピーバースディ・バンド」を主宰。オリジナル曲を中心にライブ活動するユニット「うな重」（バイオリン/アコーディオン/マリンバ）メンバー。京都市立芸術大学音楽学部非常勤講師（オーケストラ・アドミニストレーター）。

橋本玲子

Hashimoto Reiko

神戸女学院大学音楽学部作曲専攻卒業後、渡仏。パリ・エコールノルマル音楽院およびブローニュ国立音楽院にて作曲・管弦楽法を故・平義久、ミシェル・メルレ、ピエール・ジャンセンの各氏に師事。1994－2001年神戸女学院大学音楽学部非常勤講師。第2回パリ・グランパレ主催作曲コンクール、第10回全国創作童謡コンクールなどに入賞。現在は行政書士として働きつつ、作曲、楽譜出版及び「野営地」メンバーとして活動する。

Photo: 植松琢麿

塩見允枝子

1938年岡山県生まれ
大阪府拠点

1961年東京藝術大学楽理科卒業。在学中より級友達と「グループ・音楽」を結成し、テープ音楽の制作や即興演奏を行う。1964年渡米し、フルクサスの活動に参加。1965年スペイシャル・ポエムのシリーズを開始。帰国後は、イヴェントをパフォーマンス・アートとしても発展させる。1970年大阪へ移住。1990年ヴェネチアのフルクサス・フェスティバルに参加したことから、国内外での多数のフルクサスの企画に携わるようになる。1990年代には電子テクノロジーに興味を持ち、パフォーマンスに取り入れる。以後、音楽やパフォーマンス作品の作曲、視覚作品の制作など、活動は多岐にわたる。2014年より京都市立芸術大学・芸術資源研究センター特別招聘研究員。国際芸術祭「あいち2022」では、『スペイシャル・ポエム』シリーズの新作および同シリーズの資料も展示している。

Shiomi Mieko

Born 1938 in Okayama, Japan
Based in Osaka, Japan

Shiomi Mieko graduated from Tokyo University of the Arts' Department of Musicology in 1961. During her student days, she formed Group Ongaku together with fellow students and experimented with tape music and improvisation. In 1964, Shiomi moved to the USA and became a member of Fluxus. In 1965, she started her "Spatial Poem" series. Following her return to Japan, she developed the gesture of the "event" as performance art. In 1970, she relocated to the city of Osaka. Starting with the Fluxus festival in Venice in 1990, she took part in numerous Fluxus projects held all over the world and in her home of Japan. Having become interested in electronic technologies in the 1990s, she began to implement them into her transmedial performances. Shiomi continues to work in a variety of fields and genres today, including visual art, performance art and music compositions. Since 2014, Shiomi is also active as a Distinguished Visiting Scholar at the Archival Research Center in Kyoto City University of the Arts. At Aichi 2022, she is exhibiting new works from her *Spacial Poem* series and materials from the same series.

主な作品発表・受賞歴

2014 「フルクサス・イン・ジャパン 2014」東京都現代美術館、東京
2013 「塩見允枝子とフルクサス」国立国際美術館、大阪
2001 「フルクサス裁判」国立国際美術館、大阪
1995 個展「フルクサス・バランス＆バランス・ポエム」J&Jドンギュイ画廊、パリ（フランス）
1994 『フルクサス・メディア・オペラ』ジーベックホール、神戸
1990 フルクサス・フェスティバル、ヴェネツィア（イタリア）

Selected Works & Awards

2014 *Fluxus in Japan* 2014, Museum of Contemporary Art Tokyo, Tokyo, Japan
2013 *Mieko Shiomi and Fluxus*, The National Museum of Art, Osaka, Japan
2001 *Fluxus Trial*, The National Museum of Art, Osaka, Japan
1995 *Fluxus Balance & Balance Poems* (solo), Galerie J&J Donguy, Paris, France
1994 *Fluxus Media Opera*, Xebec Hall, Kobe, Japan
1990 Fluxus Festival, Venice, Italy

作曲・演出：塩見允枝子
Composition & Direction: Shiomi Mieko

出演：植松琢麿
大井卓也
上中あさみ
中村圭介
橋爪皓佐
橋本玲子
森本ゆり
山根明季子

Performers: Uematsu Takuma
Oi Takuya
Kaminaka Asami
Nakamura Keisuke
Hashizume Kosuke
Hashimoto Reiko
Morimoto Yuri
Yamane Akiko

舞台監督：尾﨑聡
照明：中山奈美
音響：有馬純寿

Stage Manager: Ozaki So
Lighting Designer: Nakayama Nami
Sound Designer: Arima Sumihisa

記録映像：株式会社青空
記録写真：今井隆之

Video Documentation: AOZORA, LTD.
Photography: Imai Takayuki

パフォーミングアーツ・アドバイザー：藤井明子（国際芸術祭「あいち2022」）
制作：村松里実（国際芸術祭「あいち2022」）、森信子（Wolf-note）

Performing Arts Adviser: Fujii Akiko (Aichi Triennale 2022)
Production Coordinator: Muramatsu Satomi (Aichi Triennale 2022), Mori Nobuko (Wolf-note)

主催：国際芸術祭「あいち」組織委員会
共催：愛知県芸術劇場

Presented by Aichi Triennale Organizing Committee
Co-Presented by Aichi Prefectural Art Theater

文化庁「ARTS for the future! 2」補助対象事業

＊塩見允枝子は、本公演のほか、現代美術展（愛知芸術文化センター10階）にも参加しています。
https://aichitriennale.jp/artists/shiomi-mieko.html

Shiomi Mieko will also participate in the contemporary art exhibition at Aichi Arts Center (10F).

STILL ALIVE
国際芸術祭
あいち2022

国際芸術祭「あいち2022」
パフォーミングアーツ

アドバイザー：藤井明子、前田圭蔵
キュレーター：相馬千秋

プロダクションマネージャー：清水翼
コーディネーター：村松里実、谷口裕子、芝田遥、菅井一輝

テクニカル・コーディネーター：尾﨑聡

票券：小森あや（bench Co.）

翻訳：ロバート・ツェツシェ
編集：鈴木理映子
デザイン：山口良太

AICHI TRIENNALE 2022
Performing Arts

Adviser: Fujii Akiko, Maeda Keizo
Curator: Soma Chiaki

Production Manager: Shimizu Tsubasa
Coordinator: Muramatsu Satomi, Taniguchi Yuko
Shibata Haruka, Sugai Kazuki
Technical Coordinator: Ozaki So

Ticket Administration: Comori Aya (bench Co.)

Translation: Robert Zetzsche
Editor: Suzuki Rieko
Designer: Yamaguchi Ryota

PAチャンネル

詳しくはこちら

各作品の背景についてのレクチャー、参加アーティストによるトークなど、パフォーミングアーツ・プログラムを多面的に体験するためのオンライン・コンテンツです。

2022年7月30日｜土｜— 10月10日｜月・祝｜［73日間］
芸術監督：片岡 真実（森美術館館長、国際美術館会議（CIMAM）会長）
主催：国際芸術祭「あいち」組織委員会
助成：一般財団法人地域創造
愛知県政150周年記念事業

AICHI TRIENNALE 2022: STILL ALIVE
July 30 (Saturday) to October 10 (Monday, public holiday), 2022
Artistic Director: Kataoka Mami (Director, Mori Art Museum/President, CIMAM)
Organized by Aichi Triennale Organizing Committee
Supported by Japan Foundation for Regional Art-Activities